

湘南オープンウォータースイミング2018

2018年9月2日 2,5キロの部

日常を刺激的にするのは想像力である。

強風、雷、波浪、かつてない猛暑、酷暑、灼熱地獄、大雨、そして災害
2万5000年ぶり異変の予感。

昨年のタイムを3分30秒短縮してゴール。1時間11分05秒

昨年2017夏の大会は第6位で盛り上がった。

今年度2018の大会は第11位（70代以上の参加者14名）（昨年と同じ
メンバー3名含む）---ムムッ---う〜ムムッ。こ、これは喜んで良いのか？

大会当日の朝6時、涼しい朝だ。激しい雨の音に目が覚める。時折雷の音を交え大空が騒いでいる。

私の腰元ベンガル君（猫です）が、夏の暑い間はベッドに近づかなかつたのに、涼しくなったとたん私の足を枕に寝ている。

重い。6.5キロを超えて来た。重い、寝返りができない。

スイミング大会は雨でも中止はない。大会中止の連絡も入っていない。

どしゃぶりの中、茅ヶ崎駅に向かう。会場の逗子海岸までは列車を含め1時間程の行程で身体はびしょびしょ。会場の海を眺めても泳いでいる人がいない。

マイクが『遊泳禁止』を叫んでいる。

会場本部で確認すれば、雷の通過を待ち、とりあえず1時間待機を決定して様子を見ているそう。雨宿りする場所もなく、砂浜の片隅でカタツムリのような格好でしゃがみ込み、傘をさし丸くなる。

前日までの猛暑から一転、気温26度。雨で寒いくらいだ。

1時間が経過する頃、西の空が明るくなって来た。いよいよ開始だ。

大会は1時間遅れで第1ウェーブから順調にスタートを始めた。

11時20分、第5ウェーブのスタートが私の出番だ。

最高齢 81 歳の男性をはじめ、リオデジャネイロ オリンピック女子日本代表『貴田裕美』 31 歳が紹介された。そして私の前にスタンバイした。おお～すごい戦いになって来たな。

オリンピック代表の選手は私の倍以上のスピードで泳いでいるので、顔を見るのも今だけだ。背は小さいし、そんなに早いとは思えない。

しかし、この大会 2.5 キロを「31 分 36 秒 6」 トップでゴールしている。

全男女総合タイムでも第 1 位である。私の「1 時間 11 分 5 秒」より少し早い。

東京オリンピックまではまだ 2 年ある。なんとかしたい。

彼女の身体は日に焼けて黒い。黒い牝ヒョウである。私はさらに黒い、やけくそである。

私のお隣のご老体に声を掛け、お歳を聞いてみた。「71 歳です」と言われ、おお～おなじだ！と叫んでしまった。

お互いよくぞここまで来たなという心の叫びが親近感をぐいと引き寄せた。

写し鏡をみて、俺も歳をとったものだと感慨に耽る。

ここには海で泳ぎの練習をしている人がいないのか真っ黒は私一人だけ。

一人、ふんどし男 61 歳が女性に囲まれ、遠くに見えるが目立ち過ぎ。

市営プールではふんどし姿で泳ぐのは禁止らしい。彼にとってはここが晴れ舞台なのだ。

スタート前の注意があり、人の足をつかんだり、引っ張ったりするのは止めましょう。スポーツマンシップにのっとり戦いましょうなどと冗談を言って笑いをとっていた。オープンウォータースイミングの大会では、スタートからしばらくの間は、想像以上のバトルが展開する。悪気なく他人の身体に乗りかかったり、足をつかんだり、押したり、やりたい放題である。

今、私の前でスタートを切ろうとしている、リオ オリンピック女子日本代表『貴田裕美さん』の足をつかむのなら、スタート合図のピポ～の直後しかない。この一瞬を逃したら一生チャンスはないだろう。それでも両足を掴むのは手ごわい。おそらくバタ足の蹴りもハンパない強さであり、あごのあたりに鋭いけりの反撃をお見舞いされそうだ。などと考えている間に、私の前にスイマーが割り込んで来た。

貴田さんの足を狙っているのは私だけではないようだ。

他にも割り込もうとする悪者があるので後ずさりする。

この時点で貴田裕美さんの足をつかむチャンスは完全に失われた。

リオと聞いて忘れられない事がある。

松任谷由実（ユーミン）が前回のオリンピックはどこでしたかね〜と聞かれ、「りおでじゃ〜ねいろ」と答えていたのを
思い出す。インパクトがありすぎて今でも耳からはなれない。

そしてスタートのピポ〜が鳴る。

いろいろ風変わりスイマーを取り混ぜての第5ウエーブの総数331人がスタートを切った。

スタートでどのような苦難に襲われようとも慌てず、平常心を保ち、心拍数をあげない事が勝つ為には必修条件だ。東京オリンピックへの道のりは平坦ではない。

襲いかかるようなスイマーの群れをかわし、直線1200メートルまで人ごみを避けるように右に、ひだりに逃げまくる。「逃げるは恥だが役に立つ」混戦状態をかいくぐった私はつかれたね。

なんと言われようとも勝負を後半に賭ける。と、決めていた私は1300メートルの折り返しでスピードをアップ。沖からの大きなうねりに合わせサーフィン状態で一気に波に乗る。水を掻く手に力が入る。そして水をかききる。

ああ〜快感。このまま大きなうねりが続き陸まで行かれたら天国への道と勘違いしてしまう。

マラソンも泳ぎの大会でも、折り返し地点を過ぎると俄然気持が楽になる。泳いだ分だけゴールがグングン近づいてくる感覚がたまらない。

今回から腕時計装着が許されていたので腕時計でタイムを見る。しかし、時計がない！

そうだ、私の時計は表面が金属だとの理由で取り上げられていた。抗議をしたが通らない。細かい奴らだ。無念。

そこで考えた。25回水をかいた時25メートル進む。100回水をかいたら100メートル。そう考えると俄然距離と時間が分かりやすくなり、気持が前のめりになってぐいぐい進む。周りのスイマーと調子を合わせる事なく、自分のペースで泳ぎ、残りの距離との明快な戦いが始まった。

ゴールに近づいてきたなと感じ始めた頃、ライフセーバーが接近してきた。

「コースを外れています！ゴールは向こうです！」と叫ばれる。本当かい、顔を上げて確認するも白いテントが一杯でゴールがはっきりしない。それでもゴールは目の前。斜め前行くスイマーの後につく。

コースの変更やらヘッドアップやらをしていると突然足がつる～。

右足のふくらはぎが麻痺しているぞ。バタ足が動かない！しかし足のツリを何回か経験してくると、しばらく右足はほっといて、そのまま泳いでいると治る事を知る。手だけでも充分泳げる。ショックはあるけれど泳ぐんだ。ここで休んでいられない。

ゴールが目の前に迫っているのだから、翼を広げ一気にゴールに飛び込みたい。横を泳いでいるスイマーも同じ気持だからここではお互い死にものぐるいでゴールに突入。

足がツッテいたのに砂浜を駆け上がる。大歓声の中、計測板を踏み越える。

まるで日本代表選手のゴールを祝うかのような大観衆の声援を受けながら走る。両手を差し伸べる人もいる。すごい歓迎ぶりだ。知り合いは誰もいないとは思えない。

親族、一族郎党、村の衆、ネコやキリン、動物達までもが手をふり、はしゃぎまくっての大声援。信じられない。

カメラマンがグ～と前に接近し「笑顔で写真を！」と叫んでいる。思わずゴーグルを頭にずらしVサインまでしてしまった。

すごい演出だな。

ゴールを過ぎるとつづいてメダルが首に掛けられる。つづいて靴磨き風の台が用意されている。「計測チップを外しますからこの上に足を乗せて下さい」と声がかかる。

しかし足が上がらない。上げようと意識はするが足は砂にぴったり接着されているかの様に砂浜から離れない。

右足がツッテいるせいか？

やむなく左手に係員が回り込んでくる。同時に、自分の足を両手で持ち、「よいしょ」と台の上に持ち上げる。

係員が元の位置に戻り計測バンドをはずす。再び両手で足を持ち砂の上に戻す。心配して見ていた周りのスタッフの安堵の気持が伝わってくる。

皆さんの熱い視線を浴びながら前によろけながら進む。

そこへ再び別のカメラマンが現れ、「笑顔をお願いします！」

この感じ完全にギャップがあるな。

もどかしい身体のダメージと、「日本代表として頑張りましたね」の様な激励を受けている私。複雑な気分。

気づけばパラッと小雨が頬に落ちた。